資料２

生涯学習分科会における主な意見

７月１４日開催の第８６回生涯学習分科会における、第３期教育振興基本計画に盛り込むべき事項（基本方針①、③、⑤）に関する主な意見は以下のとおり。

＜基本方針①　夢と自信を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する＞

（豊かな心の育成）

・自己肯定感を育むには、家庭、先生、地域の順で重要だが、地域、先生、家庭の順に人数が少なくなるので、資源配分して取り組む必要がある。学びのオーガナイザー（社会教育主事）がもっと社会を巻き込んでいく教育活動をして、子供たちの自己肯定感を高められるとよい。

（社会的・職業的自立に向けた能力・態度の育成）

・専修学校の職業実践専門課程は、企業と連携し、そのイノベーションをきちんと取り込んだ職業教育を実施するものであり、振興していくことが重要。しかし、認知度が低いという課題があり、各県・各市町村の教育委員会や高校などにも周知することが必要。

（家庭・地域の教育力の向上、学校との連携・協働の推進）

・子供を取り巻く様々な課題が発生する中においては、家庭教育支援チームを今一度全国に広げていくという努力が必要。教育行政だけでなく、民生・児童委員なども支援チームに入っていただき、生まれたときから保健・福祉含めて地域の観点で横串を指していくということを考えなければならない。

・各学校の課題や地域課題を解決するためには、コミュニティ・スクールを導入するべきである。また、各学校が置かれている状況に応じて、個別のニーズを踏まえた学校の業務改善を進めていかないと、教員も地域ボランティアもつぶれてしまう。

・多様な価値観・多様な人たちをつないで、一体化したり連携したり協働していく際には難しいこともあるが、主体性が非常に重要。どうすれば主体性が生まれ、多様な人たちがつながっていくのかという仕掛けの見える化が必要。

・家庭・地域の教育力の向上に関して、教員がどれくらい地域と連携したり、教員や地域の人材がどれくらい家庭・地域の教育力の向上に向けた仕組みをつくったのかが測れるような指標があるとよい。厚労省と文科省の連携もぜひ見える化をお願いしたい。

・例えば幼児等は、主体的に遊ぶ中で、感覚で捉えたり、感じたり、考えたりする力が付いていく。直接的、具体的な体験も、生涯を通して大事にしたい。その直接的、具体的な体験の中で、家庭教育支援チームは重要。ただし、それを迎える側も横の連携をとったり、体験の面白さを知るなど充実していかなければいけない。

・生涯学習において、子供たちが生まれてから幼児期、そして児童生徒と成長していく過程は、非常に重要。そしてそこに関わる大人もすごく大事な時期であるが、そのために社会教育主事が、若い世代からまた高齢者世代までオールマイティで対応するのは大変。家庭教育主事のように特化して、家庭教育を支援していかないと、生涯学習に取り組む入り口が育たない、入り口が育たないと、この先もなかなか生涯学習をしていく上にお

いて、ベースが難しくなるのではないか。

＜基本方針③　生涯学び、活躍できる環境の整備関係＞
（人生 100 年時代を見据えた生涯学習の推進）

・人生 100 年時代を見据えた生涯学習の推進という項目の新しさが非常に重要。この新しいテーマの内容をどのように具体的につくっていくのかが大事。
・自分の可能性を発見するための生涯学習だと位置付けるのが大変重要。産業や企業が生産性を高めて、付加価値を高めることに邁進しなければならない一方で、社会の課題を解決していこうというエネルギーも、国民には必要。そのエネルギーは、公に対する自らのポジションがどこなのかを、それぞれの立場で認知することからわいてくる。その上で生涯学習が果たしていく役割は大きいのだということを再設定すべきだ。
・嬉しさや楽しさなど学ぶ側のモチベーションの観点が組み込まれることによって、達成感を持ったり、更に次にもっとやっていこうとなる。そうしたものを政策の中に組み込む考え方が必要ではないか。もっと新しい社会を目指していく、挑戦することは楽しい、そして失敗したっていいではないかと、皆が認めているのだからもっとやりましょうという環境を作っていく政策にできるとよい。
・100 年の人生を生きていくのは簡単ではなく、どう生きていっていいか分からない人がたくさん出てくると思われる。その際、SDGs（Sustainable Development Goals）といったものに接点を、緩やかな形で取り入れられないか。
・「少にして学べば壮にして為すあり　壮にして学べば老いて衰えず　老いて学べば死して朽ちず」という言葉があるが、まさにそういった価値観を、皆がもっと強く意識して持って、教えてもらうから学ぶのではなく、自ら学ぶ、エンカレッジをしていくことが大事。
・人生 100 年時代は道が一つではない。若者だけではなく高齢者にとっても道は一つではない、第１・第２の人生という区分がなくなっている時代にしていったらよい。
・生涯学習は、常に制度が必要に応じてフレキシブルに変化し、協働で作り出すことに意味があるのでそこをしっかり強調することも重要ではないか。
・市民社会における学び直しの基盤を作っていくという観点で、生涯学習政策としての高等教育機関の位置付けを、理念的にしっかり描く必要があるのではないか。
今後、技術革新・産業構造の変化が進展すると、人は非常に高度な判断、教養、創造性等を持つ必要が出てくることが考えられるが、その際、大学に集積した制度が必要になるのではないか。市民社会時の維持のために高い教養水準を獲得する必要があるという意味でも、大学をしっかり位置づけるべきではないか。
・障害者や高齢者も含む大人についても可能性に挑戦する、多様な力を発揮して社会をけん引するべきなのではないか。そのためには大人も体力や能力、学力が伸びるということをエビデンスベースで示して国民の常識を変えていく必要がある。
・高齢者の生涯学習の推進においては、受益者であるだけでなく高齢者の経験や知識を生かしたり、コミュニティビジネスへの参画を促進するなど、地域づくりの主人公になれる仕組みづくりが必要。
・地方の人材不足への対応のため、人材育成の視点を社会教育の事業の中にもっと組み込

めないか。また、資格の取得等に結びつくインターネット配信の学習機会を積極的に活用し、将来の活躍を前提とした学びの機会提供を図ることで、人材のストックも生まれ新しい事業の創出にも結び付く。

（地域課題解決のための学びの推進）

・一般行政の中に社会教育的な学習方法（学びと学びを生かす実践）の提案が必要。住民が主体的に課題解決に取り組む活動が生まれると考える。
・社会教育主事の存在意義を高め、“学びのオーガナイザー”の役割を担うことが必要。
・現在、地域社会に起こっている様々な問題は、個別バラバラで、仕事、保健、医療など様々な分野と従来取り組んできた教育の分野をどうやってつなげるかが重要。今の社会のニーズに合わせるには、地域の中に出向いて行って、広い知識を持って諸機関・諸団体を繋げる役割を果たせる社会教育関係者が必要。
・多様な活躍をしている人たちが持っている多様な経験値や専門知を照らし合いながら、学び合うコミュニティを作る必要がある。学びのオーガナイザーが多様な課題をきちんとコーディネートして、学校で地域をどうやって作っていくのかという部分に、十分に力を入れていただきたい。
・公民館を、地域課題解決学習を推進する拠点、新しい学習と実践を連動させ、住民が主体的に地域をより良いものにしていく、大人のアクティブラーニングの場として再生すべき。行政との協働（環境・子育て支援・防災・地域福祉・地域振興など）によって、地域レベルの取組みを図れることを強調すべき。

（社会人が大学等で学べる環境の整備）

・現在、50 代の人が 60 代・70 代での仕事のために学ぶなど、長い職業人生に対して投資をする学習が生まれ始めている。こうした学習ニーズの変化を政策の中でうまくとらえ、何をすれば自分のキャリアが再び光り輝くのか、自分に投資するとどのような新しいリターンが得られるのかがわかるような学習を促進していきたい。
・社会人が大学で学ぶための一つの方法として、遠隔地でも過疎地でも僻地でも学ぶことができる MOOC をもっと使った方がいい。そして、そのように学んだ成果を学校教育のサポートに生かすことが一つのゴールとして考えられ、そのことによりコミュニティスクールが本当に機能してくると思う。社会人でも退職後でも学びを生かすステージがどこかにあれば、そのゴールのために頑張ろうというのが、とてもいいモチベーションになると思う。
・専修学校では、社会福祉士などの養成コースが１年や１年半の短期コースであり、専門課程ではなく付帯教育のような扱いになっている。短期コースも文部科学大臣が指定することが、社会人の学び直しの環境整備に資する観点からも必要ではないか。

＜基本方針⑤　教育政策推進のための基盤を整備関係＞

（ＩＣＴの利活用の促進）

・ICT の環境整備や教員のスキルアップが非常に重要であり、予算の確保が肝要。
・統合型の校務支援システムは、データ集計等がスムーズにできるよう、統一的な部分も

あるようにするとよい。

・若いうちからICTの勉強をし、自らは何か、人間の可能性とはどこまであるのかという限界と可能性を両方確認できるのが、ICTの勉強の1つの大きな役割。

・社会人が学習する際のいつでもどこでも手軽に本当に学びたいものを学びたいという純粋なニーズに対応するため、ICTをどのように活用するのかが非常に重要。効率化・利便性の向上のみならず、自分が積み上げてきた知識を教えたいというニーズも乗せて、ICT を活用する仕組みをつくるのがこの 100 年時代の学習のテーマになりうるのではないか。

・MOOC など ICT の活用においては、学び、教える新しい可能性を示唆するものがあると前向きでよい。

（教育研究環境の整備）

・廃校となった学校施設や余裕教室などをすべての世代が学び合うことのできる生涯学習拠点として再生することの意義は大きい。既存の公民館等の整備だけではなく、既に耐震化が終わっている廃校施設・学校施設を生涯学習拠点として有効活用するための施設整備の支援が必要ではないか。

（その他）

・政策全体のすべての階層、すべての政策分野について網羅的に評価指標を示すのではなく、複数階層の統合や重点分野の評価目標を明確化して、メリハリのある評価指標を設定して活用していただきたい。

・目標を立てること自体の意義を見直したり、アウトカム目標は政府の統制範囲を超えていて因果関係が示しにくい点や世論調査など設計により数値の変動が大きい調査結果を指標として用いてよいかどうかも十分検討いただきたい。

・もう少しスピーディーに日本の政策を英文化して国外に発信していただきたい。